

大阪外国語大学

## 南十字星

インドネシア語  
同窓会

2006年春 第2号

発行 大阪外国語大学南十字星会  
連絡先 大阪府池田市五月丘2-5-113-402  
電話 072-753-1693  
Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

## 草創期を振り返る

南十字星会前会長 野尻 庄藏 ('53卒 大1)

南十字星会の発足は、戦後間もない頃でした。発足前後の様子と、かつて会が取り組んだ「母校へのインドネシア関係図書寄贈」を中心に、振り返ってみたいと思います。

大阪外国語大学の前身、大阪外国語学校の開校は大正11年11月11日。馬來語部は当初から設置されていました。戦中・戦後の外事専門学校を経て、それまでの3年制から4年制の外大に引き継がれたわけです。

戦前「南方(なんぼう)」という言葉が、南洋開発の意味も込めて、日本国中でもはやされていました。大正12年から外語の教員となられた内藤春三先生が、学生らと一緒につくった研究発表の会も「南方研究会」という名称で、機関誌『スラタン(Selatan)』を出していました。卒業生のほとんどが日本内地を離れ、南方の商社や現地事業で活躍。戦時の不幸な時期は、2年生の半ばで戦場に送り出され、学生数も減りました(私の兄の野尻正男もアラビア語2年2学期在学中のまま海軍にとられ、昭和19年12月31日戦死しました)。

第1回の南十字星会の集いは昭和24年(1949年)、現在の道頓堀の「かに道楽」の場所にあった森永ストアの2階喫茶室が会場でした。発起人は石崎次雄氏と

内藤先生。当時まだ現役学生だった私は雑用全般担当でした。実は最初から南十字星会と称していたのではなく、数回重ねているうちに固定。会は学生を主に、外地から復員してきた卒業生が加わりました。

“なごやかな会”は、卒業生が増えるとともに、同窓会としての性格が強くなりました。会長石崎氏、名誉会長に内藤先生、私は副会長の1人に命ぜられ、2、3年に1度と不定期ながら会の開催を続けました。会場はミナミヤキタなどその時々で変わりました。

一方、キャンパスは高槻時代を経て上八(上本町八丁目)に移転。その後、手狭なため敷地の広い箕面の移転候補地が浮上しました。南十字星会は、この新キャンパス建設計画と合わせ「後輩に役立ててもらおう」と、新図書館にインドネシア関係の図書を寄贈することに決めたのです。資金確保と図書の現地調達の方法を第一に考えました。趣意書を作成(昭和53年4月)して全会員に送付。多くの方から送金をいただき、お手持ちの本を送ってこられた方もありました。

当時、(株)メルバブ貿易におられた秦新氏(専1)にジャカルタへの送金役を、現地駐在の大田中実氏(大11)に図書の買い付け役を頼みました。図書の臨時集荷・保管場所を服飾品卸貿易の弊社(中央区、野尻株式会社)3階の1室とし、真本豊次氏(大13)に整理の手伝い、そのほか北羅一朗氏(大3)や磯浦美恵子氏(大6)にもいろいろとご尽力いただきました。

図書寄贈の取り組みは、サンケイ新聞、読売新聞、NHKに報じられました。(2ページへつづく)



内藤春三先生(中央で挨拶)の退官感謝祝賀会。◎は司会の野尻副会長、◎端が石崎会長=昭和48年6月9日、大淀区の東洋ホテルで

多くの人のご協力を得て集まった図書は、目標を上回る 3000 余冊(点)に。昭和 54 年 11 月 11 日、新装なった大学図書館に贈呈しました。

図書館については、まだ思い出があります。昭和 20 年 3 月 13 日深夜、米軍の空爆で大阪市の大半が焼失、上八の大阪外専校舎も灰燼に帰しました。しかし、校舎の西北隅の図書館は焼けずにすみ、蔵書はほとんど全部助かりました。後年、設立された大阪外大の“資格的財産”として大いに意義を発揮する、貴重な図書だったのです。

図書館の中の“石浜文庫”は蒙古文学の権威・故石浜純太郎先生の蔵書を石浜家から寄贈されたものです。



集まった図書の分類整理

大学にどのような変化が起きようとも、貴重な蔵書を持った図書館は大阪外大の誇りであり、大きな財産であります。どうか永久に保存し、学生諸君の勉学に役立てていただけるよう切にお願いします。

南十字星会の会長は、石崎氏のあと昭和 54 年(1979 年)に私が引き受け、平成 16 年(2004 年)に山口寛氏にバトンを渡しています。冒頭に名をあげました

内藤先生や石崎氏らはすでに故人になられています。会の伝統は若い人たちへ、これからも長く受け継がれていくことを期待します。



## 歌手デビュー 「Suara」の名で

巽 明子 ( '06 卒 大 54 )

こんにちは！ '98 年度生の巽明子です。同期の方々にはかなりご無沙汰しております。元気にされているのでしょうか？今まであまり連絡が取れていなかったため、逆にご心配頂いていたかもしれません…。

しかし、今回の私の歌手デビューをきっかけに、再び同期の方々や他学年の方々とも交流を持つことができ、嬉しく思っております。

「Suara」というアーティスト名でメジャーデビューをしたのは '05 年 9 月。インドネシア語の友人数人にしか報告していませんでした。にもかかわらず、松野明久先生をはじめ、面識のなかった大学のいろんな方々からも、祝福や激励のメッセージを頂きました。外大インドネシア語のネットワークのすごさに驚きましたが、皆さんが自分のことのように喜んでくださったのが本当に嬉しかったです。ありがとうございました！

さて、ようやく 26 歳にして念願だった歌手になると

いう夢を実現できたわけですが、思い起こせば外大の後期試験の面接の時、教授陣を前にして「将来は歌手になりたいです」と答えてしまい、ポカーンとさせた記憶もあります。でも、その頃から周囲にもはっきりと宣言できるほど、ちゃんと夢を追いつけてきたんだということがわかります。「声」という意味のインドネシア語を芸名に決めたのも、やはりインドネシア語に対する思い入れが、自分では気付かない中にも強く根付いていたのだと思います。

ゲームやテレビアニメの主題歌を中心に歌っています。曲調としては、ゲームなどの物語に合わせて、神秘的な雰囲気のものから、ポップなものまでいろいろです。自分の歌いたいうたを歌うことが出来てとても幸せです。

インドネシア語の仲間の名に恥じないよう、頑張っています。どうぞ応援よろしくお願い致します！

(公式サイト <http://www.fixrecords.com/suara/> 試聴できます)



アチェ支援で「学生の会」前代表

## 吉田隆之さんダブル受賞

( '06 卒 大 54 )

「大阪外大アチェ支援学生の会」のリーダーとしてボランティア活動に取り組んできた吉田隆之さんが'05年12月、日本学生支援機構のボランティア部門優秀賞を受賞した。'06年春の卒業時には学長表彰を受け、ダブル受賞に輝いた。

インドネシア留学中の'05年3月、スマトラ沖大地震インド洋津波の被災地ナングロアチェ・ダルサラーム州を松野明久教授と一緒に訪問。発生後2カ月余りの悲惨な現地、ツメ跡を見る。帰国後「支援学生の会」を立ち上げた。

勉強会、学内写真展の開催、「アチェ新聞」の発行、ホームページによる情報提供、義援金集め、バザー参加（アチェ民芸品の販売・パネル展示）、近隣の学校での講演会などを行う。会には、インドネシア語以外の学生も参加。9月には8人の学生がアチェを訪問し、被災地を見学するとともに、プサントレン（イスラム寄宿学校）の生徒たちとの交流、小学校の備品提供などの活動を展開した。被災地の人々からの要請もあり、'06年3月に会のメンバー2人がアチェを訪れ、支援のフォローアップ。

活動は反響を呼んだ。産経新聞（'05年5月28日）に取り上げられ、JICAの雑誌『国際協力』（'05年9月号）がインタビュー掲載。ジャカルタの日本語新聞「ジャカルタ新聞」（'05年12月28日）にも記事が出た。

南十字星会は被災地復興のため「アチェ支援募金」を呼びかけた。1,046,456円の寄付を集め、アチェで救援活動を行っている日本インドネシアNGOネットワーク（東京）を経由して、一部を学生のアチェ支援活動に、残りを現地女性団体に寄付した。



学生の会の活動は多くの学生の共同によるものだが、代表として学生、学外、地域の人々などを動かし、社会を活性化するという無形の貢献が評価され、2つの表彰につながった。

吉田隆之さんの話「日本学生支援機構や大阪外国語大学からの表彰などをいただき、感謝しています。私自身が声をかけて始めた大阪外大アチェ支援学生の会ではありますが、卒業、就職をすることになり、今後、個人としての活動はむずかしくなりそうです。でも、メンバーのみんなが継続的な支援に取り組んでくれます。その決意を聞いて喜んでいます。社会人となっても、できるかぎりインドネシアに関わる活動に協力し、繋がりを持ち続けていきたいと思っています」

新代表・鎌田桃子さんの話「'05年12月に就任しました。アチェはまだまだ復興が遅れており、紛争の傷跡も残っています。アチェの人々の笑顔を見ること、アチェの今、いのちの尊さや平和の大切さを伝えることは大事です。精一杯頑張ります」(スワヒリ語3回生、インドネシア語も勉強中)

・05年9月(17日~23日)第1回アチェ支援活動。参加者は、吉田隆之、鎌田桃子、開発繭子、小玉温子、河田貴仁、山田佳弘、今井健太、浅井健太(大学院生)の皆さん。  
写真は④小学校にプレゼント寄贈の吉田さん

④は生徒たちと記念撮影。中央右に笑顔の鎌田さん。

- ・05年12月、箕面市内で写真展。鎌田さん単身で現地視察。
- ・06年3月、第2回現地視察(里井加陽、川添あずさ)予定。
- ・06年1、2、3、4月、学内外でアチェ写真展を開催。
- ・06年9月、第3回現地視察予定。



## キャンパス便り

インドネシア語専攻語代表 松野明久



### バンバン先生を招いて

南十字星会の寄付で運営されているインドネシア語主催・サザンクロス講演会の第6回(2005年11月17日)に、インドネシア大学文学部講師のバンバン・ウィパワルタ氏をお招きし、「インドネシアにおける日本研究の現状と問題」と題して話をしていただいた。

バンバン氏は森鷗外の研究・翻訳で知られる気鋭の日本文学研究者で、現在は国際基督教大学の特別研究員として日本に滞在しておられる。話の要点は、日本

に関する研究は日本語をちゃんと学び、日本の歴史や文化を深く理解しないと浅薄なものになってしまう、日本の中にある多様性も理解しないといけないということだった。今もって『菊と刀』のような日本人論が横行していて、そういう発想からは現代の日本の問題、例えば若者のひきこもりやニートといった現象は理解できないだろうと述べられた。

### 災害をめぐる2つのシンポ



インド洋津波から1年たった2005年12月、関東で2つのシンポジウムが開かれ、アチェから

ゲストをお招きし、私も参加した。

ひとつは、国立女性教育会館主催「災害と女性のエンパワーメント」(12月10-11日)。私は「女性の自立支援と女性の参画～アチェの事例から」と題する基調報告を行い、アチェから招待したノルマ・スサンティさん(「人道のための女性」スタッフ、写真=松野教授の右隣)の通訳、そして彼女の参加する分科会の

司会をした。日本からは、阪神淡路大震災、新潟地震など被災地で活動する自治体の職員や市民が報告を行なった。災害時、女性のニーズは理解されないか低く見られ、また女性のかかえる問題(暴力等)は深刻化する。特別な配慮が必要だ。しかし、経験者は「普段できていないことは災害の時はできない」と言う。集まった160人ほどの参加者は自治体の災害対策担当者、女性団体、研究者、学生といった人たちだった。

もうひとつは、防災科学技術研究所等共催「インド洋巨大地震・津波国際会議」(12月14-17日)。被害軽減に関する社会的連携をテーマとした部会にアチェのシークアラ大学法学部講師サイフディン・バンタシャム氏が招かれた。バンタシャム氏の招聘を手伝った経緯から私も出席した。参加者は防災関係の学者、企業の専門家がほとんどだったが、起きてしまった災害の被害を少なくするため社会としてできること、つまり災害対策のソフトの部分が議論された。

### 卒業論文が活発に

卒論が必修でなくなって(2科目で代替できる)以後、卒論を書く者はめっきり少なくなっていた。それが今年度は9人が卒論を書くことと宣言し、懸命に取り組んだ。むろん、教員一同喜んだ。

インドネシア語としては将来必修化をどうするか議

論しつつも、少なくとも現段階ではできるだけ書くよう指導することで教員は一致している。やはり「勉強した!」という達成感をもって卒業してもらうには、卒論を書くしかない。卒論になって初めてマン・ツー・マンの指導となり、大学らしいことができる。



9人のテーマは多岐にわたり、ジョクジャカルタの文化遺産保護、アチェ近代史におけるウラマー（法学者）とウレバラン（領主層）の対立、アチェ語の受動、ダム開発とミナンカバウ社会の変容、中東とインドネシアのイスラム主義比較、児童労働問題、汚職の文化的背景、森林破壊問題、スハルト政権崩壊と学生運動

などだった。

多くが現代的なトピックで、時事問題、社会問題への関心が高い。インドネシアに留学・旅行して、実際に見聞きしたものは当然題材になりやすい。私としてはもっと広い観点、時間的にもスパンをとった観点が欲しいと常日頃から言っている。

## バリのエコツーリズム村を訪問

この冬休み、バリ島のエコツーリズムの村を訪ねた。Jaringan Ekowisata Bali という NGO に案内されたのは、カラングサム県（東端）の山際にあるシベタンという村だった。ここはサラクという甘くて渋い果物の産地として知られていて、生産量も多いが味もおいしいということらしい。この村に滞在し、サラクを食べたり、村を散策したり、子どもたちと一緒にバリ舞踊を習ったりといったことができる。高台にあるので涼しい。



サラク酒。ピンタン・ビールのようだが、中は透明な醸造酒

サラクで醸造酒を造る試みがウダヤナ大学農学部の指導で行われたが、酸っぱくなってしまって失敗。ちゃんと製品化まで指導できる醸造の専門家に依頼して再トライするという。今は季節ではないがいつか出されたサラクは、それでも水分が多く新鮮な感じがした。バリ島の観光産業の恩恵は山奥の村まで届かない。バリのエコツーリズムは、バリ本来の自然や人々との交流を「売り」として、今やっと模索が始まったところだと言えるだろう。

## 語劇を終えて

代表 遠野友美・久野智子（2回生）

'05年11月の間谷祭でインドネシア語科は語劇「Dayang Sumbi」を上演しました。スダダ地方の伝説で「母親が娘に“若返り”して恋に落ちるが、その相手が実はわが子と分かり、結婚話を壊す工作をする」



写真は上⓪から池上友佳、遠野友美、重永友美、下川床和真、木村玄紀、中=藤沢紗弥佳、下⓪から片桐麻衣、村田亜友美、中嶋望、谷口美紗子、ほかに久野智子=以上2回生、竹田孝紀=1回生のみなさん

というストーリー展開です。本格的に語劇に取り組み始めたのは9月

後半だったので、間谷祭当日までは朝から晩まで語劇漬けの毎日。台本作り、大道具作り、キャストの全てを全員で取り組む中で絆が深まりました。

みんなで1つのことを作り上げるという機会の少ない大学生活の中で、とても貴重な経験になりました。福岡まどか先生、原真由子先生、サフィトリ・エリアス先生方には台本、発音、演技の面で指導していただいたり、衣装の準備、着付けなどをしていただいたりと大変お世話になりました。参加者12人。最後までやり遂げることができたのは、先生方の多大な協力があったからです。当日足を運んでくださったみなさま、先生方への感謝の気持ちとやり遂げたという達成感でいっぱいです。

**課外講座のお知らせ** 咲耶会は'06年度第 期（4-7月）に母校で計6回「咲耶会・課外講座」を開く。講師は大阪外大の卒業生。インドネシア語関係は、4月20日（木）=田中千晶氏（'90年卒、バリ舞踊教室ブルナマ・サリ主宰）の「バリ舞踊の魅力」 6月22日（木）=宮崎衛夫氏（'65年卒、元UFJ総合研究所常務取締役）の「アジア途上国経済発展のために果たすべき日本の役割」。各午後1時10分から90分間。



## Manga in Jakarta



ジャカルタ発

高岡 容子

( '87卒 大35)

表題は manga (マンガ) のミス・スペルではありません。日本が世界に誇れる文化、漫画であります。インドネシ

アにおいて、外来語 “manga” はしっかりと市民権を得ているのです。「漫画ばかり読んでないで勉強なさい！」などと叱られた経験を、皆さんお持ちではないでしょうか。かくいう私も、確か小学校の4年生になるまで、母親が唯一 “漫画の中の良書” と認める「サザエさん」以外の漫画本を買ってもらえなかった記憶があります。

ところが、当地ジャカルタでは、親御さんが喜々として子供を漫画教室に伴う光景が見られるのです。「うちの子は本当に絵が上手で、学校でも筋がいいと褒められるんです！」と明らかに賛辞を期待する体で作品を持参。そんなマダムや紳士方に詰め寄られ、閉口気味ながら愛想

良く参加希望申し込みに対応するプロの漫画家が、ここで紹介する前山まち子さんです。

ツアー旅行がきっかけでインドネシアに興味を持ったそうです。奇遇にも大学でインドネシア民俗学を研究したことからや



はりインドネシアに深い関心を寄せていたご主人共々、勢いでジャカルタに移住したのが1997年。以後、郵送で原稿を日本に送るといった形で執筆活動を続けていましたが、インドネシアでの漫画市場に注目するや、周囲の勧めもあって2002年に “まち子漫画スクール” (Machiko Manga School) を立ち上げました。

余談ですが、許認可手続き代行をご依頼頂いたご縁で親しくなり、同スクールは現在私の会社と同じ建物をシェアしています。

日本の有名雑誌で連載経験のあるような、本物のプロの漫画家が自ら教えている漫画教室は初めて。取材依頼が多くてメディアへの露出度が高いことも相まって、インドネシアの漫画愛好家の関心だけでなく、お絵かき自慢の子供を持つ親御さん達のブランド志向も刺激したようです。

「うちの子供、日本人の漫画家が教えている教室に通わせているの。ほら、この雑誌に載っているこの教室。もう、末はプロになるか、って言われていて(まち子さんは言っていない)」といった感じでしょうか。もちろん、中には本当に筋のいい生徒も少なくありません。大人クラスの卒業生には、まち子さんのついでで日本の漫画雑誌に投稿した人や、米国の美大に

進んで将来を囑望されたプロ予備軍もいます。

そんなまち子さんが、インドネシア移住・漫画教室立ち上げの顛末を面白おかしく綴った単行本が、この2月にスリーエー出版から上梓されました。題して「移住楽園 バグース・パラダイス」、ペンネームは “茶花ぼこ” です。お目に止まったら、お買い上げ、ご一読を。ジャカルタ在住の皆様、Sogoの紀伊国屋でも発売中です。



(中央の写真は高岡さんⓄと、宣伝色紙を持つ前山さん。本の中には、長髪の高岡さんが「Y子」として登場。会社を経営し、ダンスはプロ級などと特技も紹介されている=左。右下の写真は漫画スクールでジルパブを被った女性が教えている風景)





## 寄稿

## Apa &amp; siapa

## 「雑感随想」

奥田 忠志 ( '50卒 専26)

曲折の人生と78歳で続けている関西ゴルフ連盟機関誌の編集(記事・写真)を通じて見聞した話題、それにならずか23人(物故者6人も含め)だった専26期クラスメートの結束の固さを紹介させていただくことにした。

思い出 数多くの先輩や同期の桜を失った陸軍少年飛行兵として終戦を迎えた私は旧制中学に復学し、大阪外事専門学校インドネシア語科に進学。在学中は英米語科の同期生と東京で開かれた日米学生会議に参加した楽しい思い出や、陸軍の兵舎跡だった高槻校舎で授業中に学生寮にしていた校舎2階から出火、防火用水のバケツを両手に階段を必死で駆け上がった苦い思い出もある。卒業して商社に就職するつもりだったが、父親に請われて家業の土佐・鯉節販売業を手伝い、大丸百貨店心齋橋店の地下1階で水引をくくったりして店員生活を送るかたわら、夜はタイピスト専門学校で英会話の講師もした。

知人の勧めもあって1952(昭和27)年、毎日新聞の入社試験に挑んだ。1988(昭和63)年末までの新聞記者生活の中で語学が取材に役立ったのは、駆け出しの和歌山支局員だったとき、米兵の婦女暴行事件で警察を訪れたMPから聴き出した話が“特だね”になり、夕刊を大きく飾ったことぐらい。むしろ、国語の用字用語に悩まされた。

賞金額 マラソンやフィギュアスケート、レスリング、柔道などスポーツ界での大和撫子の活躍ぶりは大したもの。国内の女子プロゴルフ・ツアーでも昨年は賞金女王の不動裕理が1億2,246万円、19歳で2位の宮里藍が1億1,437万円を稼いで話題になるなど女子の方が男子より人気を集め、競技数もギャラリーも多くなっている。

米国からの寄稿などを参考に話題を拾ってみると...。USPGAツアーの公認試合は48もあり、毎週トーナ

メントがどこかで開催されていることになる。それにしても、最近の賞金高騰には驚かされる。昨年の賞金王・タイガー・ウッズの年間賞金獲得額は約12億7,500万円(約1,063万ドル・1ドル=120円換算)で、日本選手で最高の賞金ランキング32位だった丸山茂樹で2億3,200余万円。ちなみに、賞金女王アニカ・ソレンスタムでも3億円を超えた。

昨年の国内男子ツアー賞金王・片山晋呉の年間獲得賞金が1億3,400余万円だったことから、その差は歴然としている。プロ野球メジャーの契約金も同様。LPGAへの出場権をかけた予選をトップで通過した宮里藍をはじめ、男女を問わずプロゴルファーや野球選手にとって、米国はまさに“ドル箱の檜舞台”だ。

新年会 クラスメートの職種は元大学教授から市助役、商社、生命保険、マスコミや自営業など多種多様にわたり、住所も京阪神を中心に北海道・小樽から九州・福岡まで広がっている。それでも合会



には遠方からも泊まりがけで訪れ、10人近く集まる。インドネシアやマレーシア・シンガポールなど海外旅行にもよく出かけた。インドネシア旅行ではソロの“清き流れ”が味噌汁色でがっかりしたことや、「ブン

ガワンソロ」を合唱しながら歩いていて現地の女性グループから笑顔で拍手を送られた思い出がよみがえる(左④の写真は12年前の旅の1コマ)。

昨年の咲耶会総会・懇親会には同期では最多の6人が参加した。今年も1月25日夕、同期の新年会を広瀬加代子さん(大16期)の料理店「五事五有」で開き、旧交を温めた(写真⑥、右端が筆者)。阪大との再編・統合の協議が進む中、減っても増えることのないクラスメートの結束をますます固め、南十字星会にも参加したい。(毎日新聞終身名誉職員)

寄稿

Apa &amp; siapa

## インドネシアの歌にはまって25年

渡辺 重視 ('64卒 大12)

1975年に積水化学工業のジャカルタ合弁会社に赴任。一度日本に戻り5年後、再赴任しました。その頃、インドネシアの歌を覚えて日本に帰るといふ名目で男性だけの“ラグラグ会”(Lagu Indonesia)という同好会が誕生していました。ビールとかウイスキーなどを飲みながら賑やかに、和やかに Gubahanku とか Widri などインドネシアの民謡を中心に、コーラスではなく、カラオケでもなく、歌声喫茶風に歌う会です。

設立当初のレパトリーはわずか3曲。私が入会した時には60曲、現在は130曲くらいの楽譜がそろっています。本場ジャカルタでのラグラグ会の活動は、サリパシフィックホテルでの年末パーティーが最大のイベント。その他、あちこちのパーティーにも呼ばれて座を盛り上げています。

インドネシアから'83年に帰国後、大阪でもラグラグ会OBが昼食会などで集まっていました。そのうち「歌おう」という声が出て、練習会を開催。隔月だったのが今では月1回開いています。

それぞれの赴任国の有志が集まってコーラス団を結成している例はよくありますが、赴任国の歌ばかりを歌っている同好会はあまり聞きません。ラグラグ会はインドネシアの歌だけを歌う同好会なので、特別な存在です。ここにインドネシアのえもいわれぬ魅力があるのだと断言できるでしょう。

現在私が所属している大阪ラグラグ会は、当初は仲間内だけのノスタルジー集団でしたが、総領事館のパーティーとか、インドネシア関連の催しには機会あるたびに出演してきたこともあり、日伊友好活動に欠くことのできないグループになってきました。総領事館の領事、副領事がラグラグ会の大阪会員に名を連ね、年に1、2回は領事のお宅で練習会を開いています。そんなこんなで、総領事館の催しには、ラグラグ会も招待を受けるまでに

なっています。

退職し、仕事上でインドネシアとの関連がほとんど無くなってからも、歌を通じてインドネシア語の勉強は続いています。インドネシアで各地に出張しても共通語で話が通じるから、インドネシア語を解すると思っていたわけですが、これが実は独りよがりでした。地方民謡は簡単ではありません。改めてインドネシアの多様性を実感しています。独立後に出てきた歌のほとんどはインド

ネシア共通語。でも、民謡になると、バタック、スダ、ジャワ、ダヤック、ミナハサ、バリといういろいろ。辛うじてメナンカバウ、マルクの歌詞で近似発音から類推できる言葉がたくさん出てきますが、全体的にはとてもむずかしい。(今は



ジョクジャの知事を迎えて昼食会で混声合唱。後方の右端が筆者  
= '05年11月12日、京都のガルダレストランで

先人の努力でラグラグの楽譜に掲載されている歌詞の意味は、大体掴めています)。

ラグラグ会は今や私にとって一つの大きな生きがいになっています。皆と一緒にインドネシアの歌を、ビールを飲みながら、おかきをつまみながら、かつての“歌声喫茶”を再現しています。

インドネシア語に関しては、留学生との通信文や総領事館に発信する文書などで学生時代以上に学習せざるを得ません。その結果、病膏肓に入るを地で行き、2年半を費やしてB5版560頁の日本語インドネシア語辞典を完成させました。俗語、卑語、差別語など含んでいるので一般販売はせず、僅かな部数を製本し身近な人に頒布する程度ですが、これもラグラグ会あっての成果です。

ラグラグ会万歳、インドネシア語万歳、学習する老人万歳、月に一回大きな声で歌い横隔膜の訓練万歳！インドネシアの歌を愛する同好会万歳！

とにかく楽しい!! 皆さんも一緒に歌いませんか!



寄稿

Apa &amp; siapa

## 写真を始めて50年

西村 耕二 ('56卒、大4)



古い話になりますが、高校生の時は、どこか農学部のある大学へ行って鶏の研究をしようと思っていました。私の親父と親しかった南十字星会初代会長・石崎次雄さんから、こう言われました。「鶏の研究では飯は喰えん。大学を卒業してからも趣味としてやればよいから、外大のインドネシア語へ行け」

そこまではよかったです。外大へ入ることは私にとって、そう簡単ではなかったのです。いつまで経っても入れず、とうとう内藤春三先生に無理矢理に入れていただき、皆さんの仲間入りが出来たわけです。

さて、インドネシア語の1年先輩に北羅一朗さん(故人)という何事にも優れた才能を持ち合わせた人がいました。秋の語劇祭では、脚本から演出まで彼が手がけ、春の外大オリンピックでは、カメラマンとしていろいろ素晴らしい写真を撮ってくれたのです。

「卒業すれば私もカメラを買い、こんな写真を撮ろう」と。その時受けた刺激が、写真を始めるきっかけとなりました。

卒業して3年後、念願のカメラ(キヤノン)を入手。4万5千円。初任給が9千円の頃でしたからかなりの出費でした。新しい「高級カメラ」を担いで、日曜日ごとに方々に出かけ腕を磨きました。

最初に入社した文具会社「タチカワペン先」や、その後、独立してつくった会社でも貿易の仕事をしていた関係上、海外の写真も多く、観光案内に使えるようなアルバムはたくさんたまりました。

その間、カメラも進化。新しいものが続々出てきました。ピントが簡単に合うオートフォーカス。そしてフィルムのないデジタルカメラ...。今、気が付いてみると、50年近い年月が経っています。

海外への出張や旅行はたくさん経験しましたが、インドネシアへは1度も行っていません。計画を立てたら、その都度、暴動や爆破事件が起きたりして断念しなければなりません。ただ、マレーシアには4度訪れ、下手なマレー語を使いながら南国の写真を撮って来

ました。(写真④はペナン島の極楽寺。⑤は同島の寝釈迦佛寺)

先年、陸上競技の先輩でスペイン語の教授をしておられた方が、望んでいたスペイン行きを一度も果たせぬまま亡くなられたことを聞きました。「これはいかん。今年は何としてでもインドネシアに行こう。まずはバリ島、次はジョクジャカルタへ。そして、インドネシア歴・滞在何十年の先輩や後輩の方々の仲間入りを」と考えています。

写真以外に2年半前から俳句を習い始めています。若い頃からやりたいと思っていたことのひとつです。まだ未熟ですが、最近作を披露します。俳句に堪能な方がおられましたら、ぜひ添削をお願いします。

- ・押し上げて もぐら顔出す 春の土
- ・白鷺の すね長く見ゆ 水かれて
- ・草いきれ 廃線の鉄路 よこぎれば
- ・庭に来て 時に長居や 法師蝉
- ・草紅葉 犬に好みの 道のあり



## 寄稿

## Apa &amp; siapa



### まだ現役 通訳勉強も 原 勝利 (50卒 専26)

“生涯現役”を貫こうとしている81歳です。戦争体験を少し。

昭和19年4月、新造貨物船「大慈丸」(2813総ト)に3等航海士として大連で乗船し、横須賀軍港に回航。6隻の船団で7月10日朝出港したが、3日後に父島西北約180キロで撃沈された。漂流8時間。一命を取りとめる。

2度目の危機は20年1月8日、台湾海峡入り口で。9隻の船団で門司を出たうち、8隻が撃沈された。私の乗船した「大雅丸」(7000ト)は座礁。積荷を投棄して基隆港へ逃れた。修理を終えた時に爆撃にあう。再修理の

あと、狙われていたのか、またまた爆撃され沈没。そうこうするうちに終戦。21年6月、広島・大竹港に引揚船で帰還した。

死と直面しながら、海外雄飛の夢断ちが多く、22年外事専門学校に。インドネシア語より、何とかモノになったのは英語。同和火災に入社。55年定年退職後、千葉市に原損保調査会社を設立した。「死んだ気になれば、何でもできる」。目下、通訳の試験を受けるべく勉強中。

### 現地で空手の指導 太田浩司 ('87卒 大35)

現在Astra Daihatsu Motor勤務。卒業して約20年。'85年卒の清島健郎先輩(Orix Indonesia勤務)と一緒に、インドネシアに来てまで学生時代と同じようなこと(Jakarta Japan Clubの空手部で指導員)をしている。最近、幼稚園から小学低学年が増え、託児所の保育士のような状態。(写真の左端が清島氏、右端が私。前列中央は代表者の市原和雄氏=当地の日本食スーパーマーケット経営者として有名な方)



### テンペブーム in Japan

インドネシアの屋台やスーパーでよく見かけるテンペ(大豆醗酵食品)。最近、その栄養価や健康効果から日本の百貨店やスーパーなどでも売り出され、ちょっとしたブームに。



「食べてみたいけれど、どう調理すればいいの...」。そんな人にお勧めのレシピをひとつ。

簡単で、おいしくできます。一度試してみたいかがでしょうか？

(芝田亜希 大51)

(市販のテンペは100gで150円ほど)

### テンペのカラアゲ



【材料】1～2人分  
 テンペ...100g  
 小麦粉...大さじ1.5  
 塩...少々  
 醤油...お好みで  
 ねぎ...適量  
 揚げ油...適量

テンペを1cmほどの厚さに切る  
 水で溶いた小麦粉に塩・醤油・ねぎを加え、好みの味にする  
 切ったテンペに油をからませ、中温で1～1.5分さっと揚げる  
 色づけば出来上がり。パリっとしたカラアゲになる





## 懐かしい仲間

### '62卒 大10期生

**東西合流で** '05年10月16日から1泊2日で3度目の東西合流同期会。場所は浜名湖畔の館山寺温泉・遠鉄ホテルエンパイアだった。西の折口、豊田の両兄が幹事。同期24人のうち、連絡先不明5人、海外滞在・出張3人、物故1人除き15人が参加した。

夕方に到着後、それぞれゆっくり温泉に浸かる。そして宴会。まず、'04年4月に亡くなった乾野君に黙祷を捧げた。歓談しアルコールが程よく回った頃、順に近況報告。病氣、闘病、介護、健康法、奥さん孝行、孫の話等々。時には大爆笑もあり、和気藹々の雰囲気だった。部屋に戻ってから“2次会”。海外での苦勞、思い出でまた盛り上がる。翌日は生憎の小雨。それでも、ゴルフ組と観光組に分かれて秋の1日をたっぷり楽しんだ。

2年毎の開催。次回幹事は東の田中、辻の両兄。再会を楽しみにしている。(松木 優)



## 消息・ひとこと

池永義啓(専18)=札幌市

商社マンから福祉の世界に。遠く離れているため、会報に懐かしさが募る。

藤原 剛(専18)=港区白金

'04年秋、東京へ引っ越しました。

土井禮二(専20)=大津市

83歳。活動的なことは出来ません。旧友も少なくなりました。

東郷芳温(専21)=千代田区

内藤先生に大恩あり。81歳を迎えても、南十字星にあこがれを抱く。

板坂勇夫(専23)=杉並区

毎日インドネシア語を使う仕事に従事しています。

小原義男(大1)=名古屋市中村区

インドネシア語の司法通訳(警察・検察・裁判)また尺八宗家として演奏会や後進指導に多忙な毎日。

中村 徹(大6)=高槻市

「今日」に感謝しつつ、まだ見ぬ「明日」に好奇心いっぱい。

前田正一(大7)=鎌倉市

現役半分、環境関連に取り組んでいます。

西田達雄(大8)=調布市

'05年8月、ジャカルタのPERSADA大学で1500冊の図書贈呈式。(財)日本インドネシア協会・福田康夫会長の名代として出席。

林喜久雄(大8)=沼津市

現在も現役。ニチメン時代には通算17年間5回のインドネシア駐在。それなりに南国生活をエンジョイ。

道廣健吾(大9)=大田区

後輩たちのアチェ支援活動に感激。私も05年2月から約2週間、日本政府の国際緊急援助隊の一員としてアチェに派遣されました。

山下 進(大9)=宇治市

健康維持を第一に、ゴルフ・旅行・バードウォッチング。

堀田 実(大11)=船橋市

退職して3年半。旅行、ゴルフ、釣りに...

小川逸郎(大12)=八尾市

41年のボルネオ生活を終えて“日本定住”。

山本 駿(大15)=岡山市

岡山インドネシア友好協会の留学・研修生と交流中。

一ノ瀬晋(大38)=ムンバイ

'05年7月31日から転勤でインド在住。

加島督枝(大38)=神戸市垂水区

'05年3月、海の見える所に引っ越し。

中田 梢(大51)=石川県小松市

先輩方のご活躍を知り、自分に問いかけをするきっかけに。'06年、インドネシアに住むつもり。

### 投稿のお願い

「南十字星」の第3号は10月に出す予定です。投稿をお待ちしています。テーマは自由。原稿の長さは、EメールならA4で1枚分800~1000字程度。カラー写真もぜひ。送り先は岩谷英志のメール(rocky3@wombat.zaq.ne.jp)まで。

住所 〒563-0029 大阪府池田市五月丘2-5-113-402

(Tel 072-753-1693)